



大阪部会(第 53 回)

日 時: 2017 年 5 月 13 日(土) 18:00~20:15

場 所: 同志社大学大阪サテライトキャンパス

【内容要旨】 第 53 回の大阪部会の出席者は 13 名。

(1)最初に、篠原総一代表(京都学園大学)から、最近の経済教育ネットワークの活動についての報告があり、3月の年次大会シンポジウム、4月の東京部会、名古屋部会の内容等が紹介された。次週には札幌部会が予定されている。

(2)奥田修一郎氏(狭山市立南中学校)からは、まずふたつの教材が示された。ひとつは、貿易に関するものであり、日本の輸出入品目や貿易相手国を学んだ後、貿易の利益を考えさせる。各国が得意(比較優位)な産業に特化することで、全体としての生産量が増加し、それを交換しあえばお互いに利益が生まれる、というのが教科書的な考え方であるが、それを生徒に理解させるために、ウサギとカメの協力関係に例えるなどの工夫をしている。

関税はそれを妨げるものであり、次の教材ではFTAやEUの経済統合を学び、関税ゼロの意義を考えさせている。一方で、英国のEU離脱やトランプ米大統領のような自由貿易に反する動きも、とりあげている。奥田氏のこの授業展開できわめてユニークなのは、両時間ともに、生徒に、トランプに宛てた手紙を書かせている点である。学習を重ねることで手紙の内容が変化し、自由貿易への理解が深まる一方で、それが理想通りにはいかない理由を考えることにも役立っている。

これらに加えて、経済分野全般にわたる知識・理解学習のための四択問題が30問紹介され、さらに複数学級でそれらを出題した正答率の分析結果なども示された。このような練習問題は、振り返り・確認学習としても、試験対策としても有効である。ただ、篠原代表など専門家の目からは、研究者の間でも意見が異なる問題や、過去と現在とで常識が変化した問題などもあり、教科書的には正解だとしても、実際にはそう断言できないものも多いとの指摘があった。

(3)次に大塚雅之氏(三国ヶ丘高校)より、「経済分野への導入教材」と題する授業実践が報告された。この授業は、高校政経の教科書の経済分野が、抽象的な概念学習や歴史・思想史から始まることが多く、生徒たちに難しい印象を与えがちであることから、身近で分かりやすい経済導入授業として提案されたものである。まず第一段階で50円の予算をチロルチョコとうまい棒にどう配分するかを考え、最大の満足を与える組み合わせを決める。次の第二段階で各班にチロルチョコとうまい棒を生産させるが、各班の生産性が異なるものとし、限られた時間をどちらの生産に振り分けるかを考えさせる。その上で作られた物を他の班と交換し、好ましいチロルチョコとうまい棒の組み合わせを何セットつくることのできるのかを競わせている。この授業は、経済学習において最も重要な基本概念である「分業と交換」、あるいは「国際分業と国際貿易」のメリットを体験させるものとなっている。

(4)続いて山本雅康氏(奈良学園中学高校)からは、「「18歳選挙権」や新科目「公共」を見据えた租税に関するアクティブラーニングの授業」と題する報告があった。これは2月に大阪部会で報告され



た中学生向け授業を発展させ、高校現代社会の授業として構想し直したものである。租税や社会保障支出に関する異なる考え方を六つ提示し（たとえば、税金は最小限にすべき、や所得額に応じて税金を支払うべき、など）、各人に与えられた持ちポイントを、まずは個人的な判断で、重視する考え方に多く、そうでないものに少なく配分させる（2月の報告では1位から6位までの順位を付けていた）。次に、グループで調査や議論をして意見を調整し、グループとしてのポイント配分を決める。そして各グループがどれを重視したのか根拠とともに発表し、それらを聞いた上で、再度個人的な判断でポイント配分をする、という授業構成である。ポイント配分の変化が面白く、効果的な学習ができるよう工夫されている。

(5) 河原和之氏（立命館大学等）からは「自動車生産から経済地理的見方・考え方を育てる」と題する授業提案があった。自動車産業にしぼって、「なぜそこに自動車工場を作るのか、作れるのか」を問いながら、見方・考え方を培う授業例である。まずなじみの深いトヨタ自動車の愛知豊田工場の立地条件や発展経過を学び意見交換し、ついで90年代福岡での生産開始の理由を考えさせる。さらに、メキシコの自動車産業の大きさとその理由、EUでの生産環境、スペイン自動車生産の意外な大きさなどを学びながら、様々な観点から多面的・多角的に経済現象を考察・分析し表現する授業となっている。

（文責 野間敏克）

次回開催予定：2017年7月15日（土）、時間は18:00～20:00、場所は未定。